



It's happy days

-It's happy days-

ミレディの華麗なる一日

A.M. 05:55

女子学部フローレスの二画、寮の自室。その窓から差し込んでくる朝の陽光に誘われて、私——如月美冬は目を覚ました。

昨夜、ベッドに入っただのは午前一時過ぎだったはず。睡眠時間は四時間強ということになる。今朝は特に急ぐ用もないから、少しくらい寝坊してもいいと思っていたんだが。幼い頃からの習慣とは言え、この時刻には必ず目が覚めてしまう自分が少し恨めしい。

「早起きは、三文の得……。起床点呼の七時まで、自由時間が手に入ったと思えば……」

自分に言い聞かせつつ、ベッド脇のローチェスト上に置いてあるコップ一杯の水をあおる。それで二度寝の誘惑を振り切つて、私はベッドを降りた。

初夏の早朝、さわやかな風を入れようと、窓を開ける。

「む……。少し、臭うかな」

季節柄、寝汗をかいた身体をそのままにしておくのは抵抗があつた。自室の中に設置された浴室でシャワーを浴びるため、寝間着ネグリジェを脱ぎ始める。

「当たり前のように、朝、湯浴みをする……か」

朝の光に裸体を晒し、まとめていた長い髪をほどきつつ、苦笑する。

「下級生カリキュラムCの頃は、朝のシャワーが憧れだったのにな。市井しせいでは当たり前なんだろうが……」

浴室つきの個室は、教導権を持つ監督生以上の女生徒だけに与えられた特権の一つだった。

そもそも女子学部フローレスが全寮制を採っているのは、一流の淑女たる基礎の基礎、規律ルールと抑制リフレスの大切さを集団生活を通して教えていくためだ。食事や就寝と共に、入浴の時間も礼儀作法を教育する場として多に活用される。薙刀なぎなたや弓道など運動部に所属している場合を除くと、一般の生徒は一日一回しか浴室に入れないのが女子学部での決まりごとだった。

実際には、綺麗な年頃の少女たちが一日一回だけの入浴で夏を過ごせるはずはない。大勢の友人と協力しあつて湯の入った桶を用意して「おしぼり」を作り、気になる部分を丁寧に拭くのが夏の朝の日課になる。気の利いた娘なら、こっそり持ち込んだ香油アロマを湯桶に一滴落として、些細なお洒落を楽しんだりもする。

「ゆみなも今頃、きつと、似たようなことをやっているんだろうかな」

友人と協力して、不便や窮屈さを楽しみ思ひ出に変えていく。そんな日常の繰り返しの中で、引つ込み思案な彼女も少しずつ変わっていくはずだ。ここは不自由な鳥籠ではなく、未熟な自分が一人前になるまで育ててくれる、優しい揺り籠なのだと気付いてくれるはずだ。

——そう、かつての自分と、同じように。

「おや……？　そういえば」

浴室の扉を開きかけたところで、はたと違和感に気付いて後ろを振り向いた。

そこにあるのは、私のベッド。寝惚けながらも無意識のうちに畳んでおいた薄手のタオルケットだけがある。

そこには、本来居るべきあの子の姿がない。

「やれやれ、またか……」

溜息をひとつ、私は手近にあったバスタオルを裸身に巻くと、ベッドの方へ歩み寄っていく。そして、ベッドとローチェストの間にある、ごくごく狭い空間に右腕を差し入れた。

確かな手応えがあった。

私は寝間着姿の彼女の帯を掴んで、力任せに吊り上げる。その身体は本来実体のない神気で出来ているから、体重などあつて無きがごとし。神通力を応用した術でいくらでも体重は増やせるらしいが、ベッドから転げ落ちてなお目が覚めないほど深い眠りにある今は関係のない話だ。

「こら、鵺ぬえ。起きろ。朝だぞ」

私の腕一本で目の高さまで吊り上げられ、ぷらんぷらんと揺れている幼女の名を呼ぶ。

三強と呼ばれた太転依たゆたいの一角、はるか昔に人々を恐怖させていた物の怪。——今の私にとって、手の掛かる娘のような存在でしかないが。

「むにや……むにゆ……。まま、あと、ごふん……」

鵺が夢うつつで呟く。今日最初の一言がそれかと思うと、もう笑うしかない。

「やれやれ、私の倍は寝ているはずだろうに」

呆れもするが、朝礼まであと一時間ある。私は鵺をベッドに寝かせると、一度は畳んだタオルケットを広げてそつと身体にかけてやった。

「しかし、どうして鵺はいつも狭い場所で寝たがるんだ……。落ち着くのか？」

太転依ではない私には、どうにも理解しかねる。

A.M. 06:34

シャワーを浴び、制服に着替えた私は、鵺の寝息を聞きながら図書室で借りていた小説を読み始めた。

私が自由時間に読む本といえば、以前は十代の少女を主人公に置いた恋愛小説が大半を占めていた。だが今は、大人を主役に置いた文学作品ばかりを読んでいる。ある程度の実体験を積んだ今、典型的な恋愛小説は上辺だけの綺麗さを綴った物語だと感じてしまい、純粋に楽しめなくなったからだ。このシーンは読者に媚びているとか、物語の都合で男性を美化しすぎだとか、そうした作者の手の内が見え透いてすぐに冷めてしまう。

その代わり、今までは趣味に合わないと避けてきた作品群——目を背けたくなるような人間の汚い部分をありのままに描写する文章や、作家の実体験を元に血を吐く思いで綴られた説得力のある物語の方が好ましいと感じるようになった。いや、むしろ、一種生臭くてどろどろしたものの中にこそ、本当に大切に美しいものが隠されているのだろう。

「どちらも、男女関係や恋愛を扱っているのは同じなのにな。こうも違うのだから……」

自分の感性が、夢見がちな少女から大人のものに変化してきたのかもしれない。それが小説の趣味ひとつにも現れているのではないか。賢さかしい自己分析ではあるが、何だか不思議な気分になる。自分自身はそこまで劇的に変わったと思えないのに。

「……ん？」

ふいに、テーブルに置いたままの携帯電話が震え始めた。メールの着信らしい。

おそらく、差出人は彼だろう。

「今朝はずいぶん早いな……」

いつもなら、七時少し前に私の方から電話をしているのだけれど。どうにも朝は苦手だとぼやく婚約者の顔を思い出しつつ、携帯電話を手にとって確認してみる。

案の定、メールの差出人は裕理だった。

『おはよう、美冬さん。今朝はモーニングコール無しで起きたよ！ 今からランニングに行ってくる。ひよつとしたら、まだ寝てる？ 僕の勝ち!!』

思わず苦笑してしまう。やれやれ、早く起きたのはたまたま今日だけのことだろうに。

「いいや、もうとつくに起きているよ。おはよう、裕理。毎朝こうだと、私も楽でいい」

そんな文面のメールを、すぐに打ち返す。

たったそれだけで、上質な物語を読んだ後のような、あたたかい気持ちの胸の中に広がる。自分分は独りではないと安心できる。今日はきつと良い日になると信じられる。困難があっても頑張つて乗り越えられる気になる。

「やれやれ、典型的な恋する乙女じゃないか。どこが大人になっているのだから」

私と裕理の関係は、いつまでこんな感じでいられるのだろうか？

「……もちろん、末永く、いつまでも」

純粹な想いの外縁に、大人としての経験を積み、己の器を広げて成長していく。

彼となら、それが出来ると信じられる。

A.M. 07:00

女子寮の起床時刻だ。静寂の時間が終わり、女子学部が喧噪に包まれていく。女子寮のそこかしこで監督生たちが声を張り上げ、後輩たちを夢の中から現実に戻していく。

総代である私は、その監督生たちを総括する立場にある。直に一般の女生徒らを管理指導することはない。朝一番にするべき仕事は、寮母や教諭の朝礼に同席して創聖学院および女子学部全体の動きを把握することにある。

おっと。その前に、仕事はもう一つあった。

「ほら鶴、早くしろ。あと一分で着替えが終わらないなら置いていくぞ！」

寝惚け眼を擦りつつ、いつもの黒い着物を身にまとう鶴に一喝。

「ま、待つのだじゃ、まま。足袋が、足袋が見つからぬ……」

「だから、翌日の着替えは寝る前に用意しろと何度も言っているだろう。いつ覚えるんだ?！」

「き、昨日は、ぱぱのところに遊びに行っておつて、夜が遅かったのじゃ、ままだ知っておろうが、そんなに怒らずとも良いではないか……」

「言い訳はいい！ さ、あと三十秒！」

「すばるたじやー、教育ママゴンじやー、いつか家出してやるう……」

ぶつぶつと文句を言う割に、脱いだ寝間着はきちんと畳んでベッドを整えている。

大丈夫だよ、鶴。君が毎日成長していること、私はちゃんと見ているから——。

「ぶつぶつ……きつとままだ、わしが一人ではぱぱのところへ遊びに行ったから嫉妬しておるんじや。だから必要以上に怒るんじや。いつもはもつと……ぶつぶつ」

——かちん。

「……誰が嫉妬しているだ?! 聞こえているぞ、鶴!!」

「な、ななな、なーんも言うておらんぞ、わしは、なーんも言うておらん!!」

全く、最近は余計な口ばかり増えてきたな。困ったものだ。
それとも、私は本当に嫉妬しているのか？　それが無意識に言動へ表れている？
いや、そんなことはない。——ない、と、思う。

A.M. 07:30

班ごとに分かれて行う早朝点呼が終われば、朝食だ。

全寮生二百人強を優に収容する大食堂、ここへ一同に会して食事を摂る。給仕はいわゆるbuffet形式で、複数用意された料理をセルフサービスで選んでいくのだが、栄養バランスを考えない偏食を続けると監督生から指導されてしまう。半年も寮で過ごせば、自分にとつての適量をバランス良く食べられるコツが自然と身につくわけだ。

ちなみに私は、今朝はベーコンとスクランブルエッグを中心にした洋食にしてみた。トレイを持って、歴代のミレディが座り続けている指定席に腰を下ろす。ここからなら食堂全体が見渡せるし、声の通りもいい。

「全員、揃ったか？　監督生は、異状があれば挙手ののち、報告を」

声を張って呼びかけるが、挙手はない。全員への通達事項があればこの機会に伝えることになるが、寮母や教諭の朝礼で別段変わった話はしていなかったから、今朝は省略。

そして私は、傍らにいる鶴に目配せをする。鶴はそれを受け、自席の座面に立ち上がった。

「皆の衆、ちゃんと膳を用意したか？　風邪をひいたとか熱を出したとかで食欲がない者はおらぬか？　……おらぬか。うむ、健康おおいに結構！　では、しばし黙祷して、今日一日の無事を祈りつつ、それぞれの信じる神様やらお百姓さんやらに感謝の意を捧げるとよいぞ。……よし、黙祷やめ。さあ、いただきます、なのじゃ!!」

すっかり恒例となった鶴の音頭で食事が始まる。本来はこれも私の仕事だが、鶴自身は食事を摂る必要がないから、せめて場に参加した気になりたいという要望で始まったことだった。

最近では、私が食事を摂っている間に調理室へ回り、食器を洗うなどの後片付けを手伝うこともあると聞いている。本当に、見違えるほど良い子になったものだ。

「……美冬さん」

あとはカップのスープを飲み干せば食事が終わるというところで、不意に声をかけられた。

生徒ではない。一般学部で言えば学活担任にあたる生徒指導を受け持つ、おおした扇下教諭だった。

「あ、はい。何でしょうか」

「食事が終わり次第、理事室へ。多嘉山理事が呼びです」

「？　理事が何のご用でしょうか。さきほどの朝礼では、何も……」

「皆の前では話し辛い要件だそうです。そう言えば、あなたには通じると伺っています」

——という、例の件か？

「仕事なら、わしのことなど気にせず行つてくると良いぞ」

話を聞いていた鶴がそう言ってくれた。私が姿を消しても、鶴の面倒はましろやゆみな、あるいは町田ほか後輩たちが見てくれるだろう。

「すまないな、鶴。すぐに戻るから」

言い置き、スープを飲み干すと、私は席を立った。

講義が始まるのは九時からだから、朝食を終えれば一時間ほどの自由時間になる。自室に戻って予習を始める者もいれば、庭の木陰で学友の膝を借りてもう一眠りする者、気心の知れた同士でモーニングティーを楽しむ者と様々だ。

普段の私は主に、この時間を使って財閥に連絡を取っている。太転依に関する事件が何か起きていないか、それはましろや裕理に相談すべきことか、それとも官憲に委ねるべきか。そうした部分を信頼できる担当者らと相談し、処理していく訳だ。

しかし、最近はその必要がほとんど無くなっていた。ゆみなにお願いしてもらって、鳳凰とその眷属を小笠原諸島の無人島へ。アメリの説得で、応龍とその眷属を日本アルプスへ。それぞれに移住に成功したことで、葦原町内における太転依の棲息数が半減したからだ。

ましろや綺久羅美守毘売が悲願としてきた「共存」とは相容れない苦肉の策ではあったが、これによつて太転依同士が起こす縄張り争いなどの諍いは減り、人間との間に起きる軋轢もほぼ解消された。お陰で裕理は一時的に八衢の血統につきまとう宿命から開放され、如月家の婿として相応しくあるための勉強に費やす時間を手に入れたことになる。

そして私は、一足先に如月家へ戻り、俗世を離れ、彼との婚姻が成立するその日まで潤沢な時間を自由に使えるようになるはずだったんだが――。

「良く来てくれました、美冬さん。フロレス改革の旗頭!!」

理事室に入った途端、多嘉山理事が大袈裟に手を広げ、私を迎えるポーズを取る。

「あ、あの、多嘉山理事……。そういつた大袈裟な表現は……」

「いいえ、大袈裟ではありません。事実を述べたまで。……あなたが学院に残ってくれなければ「開かれた次世代の女子学部」へ生まれ変わる最初の一步すら踏み出せなかったのですから」

「は、はあ……」

春先のこと。私と裕理の関係が公になった時点で、本来なら私は女子学部を離れなければならなかった。ミレデイの特権を濫用して学院外の男子と私的な交誼を繰り返した上、婚約まで結んでしまったのだから。後輩への示しもつかないし、普通に考えても停学はやむなし、理事会の意向次第では強制退学になつていてもおかしくないだろう。

ただ私は、最上級生になる前にはすでに卒業できる単位を取得していた。それ以前の素行にも問題は一つなかった。後輩たちも、私の処分に厚情を請うための署名活動を自主的に始めていたという。安易に私を処分すれば、女子学部一波乱起きるのは避けられなかったろう。

これはあくまで噂だが、理事会は私に自宅学習を薦めるつもりだったらしい。確かにこれなら、在校生が私から悪影響を受ける心配もないし、女子学部は長い歴史の中で初となる不名誉な退学者を出さず、私自身も無事に卒業証書を受け取れる。創聖学院と如月家両方ともが傷を追わずに済むことになる。落しどころとしては妥当なところだろう。

しかし、そうはならなかった。私はこの通り、今もミレデイとして在学を続けている。

全ては、多嘉山理事が予想外の情熱を燃やし始めたことが原因だった。

「……女子学部は、変わらなければなりません」

私に背を向けた多嘉山理事が、理事室の窓越しに中庭の光景を見下ろす。そこでは、何人かの女生徒たちが朝のおだやかなひとときを過ごしていた。

「誇るべき伝統、最新の設備と教育理論。私たちは……私は、この女子学部が一つの理想郷なの

だと信じ続けてきました。ここで働けることが誇りだった。一流の淑女を輩出することが生涯を賭けるべき使命、汚れた世俗に染まることなき高潔な魂を育まねばならぬと。ですが……」

「何か、きっかけでも？ 差し支えなければ、お聞かせ下さい」

「自分の価値観が覆るような出会いがあったのです。美冬さんと同じですね」
春先に起きた一連の事件が、私の脳裏をよぎる。

「太転依との……ましろや鶴との出会いですか？ 確かにあれば、私にとつても衝撃的でした」
背を向けたまま、多嘉山理事が首を振る。

「違うのですか？ では、誰が」

「……裕子さん。いえ、泉戸裕理君」

自分の耳を疑った。何をどう間違えばそういうことになる？

絶句する私の気配を察したのか、理事は朝の光を背にして振り返り、子細を話し始める。

「私は知らなかった。彼が荒ぶる太転依たちに臆することなく立ち向かっていたことを。鳳凰が伝統ある学舎を破壊した時も、鶴ちゃんが暴れた時も。いかに酷い言葉を投げかけられても意に介さず、成すべき正義を貫き通した英雄がいたことを。……いくら特別な霊能^{ちから}があるにせよ、原理はつかめず存在すら自覚できない、武器としてはあまりに不確かなものなのに。一步間違えば命すら失いかねないのに。その恐怖に打ち克つて、危険を顧みず私たちを守り続けてくれた」

「あ、あの、理事。彼は単に、向こう見ずで無鉄砲なだけで」

「いいえ、違います。彼は自分の命など惜しくないと考える理由があったのです。……美冬さんとの間に育んだ愛。揺るがぬ心の支えがあったのだから」

ぼふつ——と、自分の顔が変な音を立てて蒸気を噴いた気がした。

「と、とと、突然何を言い出すすか、理事……」

「そう顔を赤くしないで。恥ずかしがることはありませんよ、美冬さん」

明後日の方向に勘違いしたまま、多嘉山理事が悟りきった笑顔を浮かべる。

「我々は井の中の蛙なのだと自覚せねばなりません。女子学部^{フロレス}は理想郷などではない。市井にも、立派な男性^{おとこ}はたくさんいる。格差にひるむことなく、偏見に流されることなく、物事の本質を掴んでいる人たちがいる。彼らから学ぶべきことは多い。狭い世界に閉じこもっている限り、私たちは永遠に彼らに敵わない。歴代のミレディの中でもとびきり優秀なミレディ・オブ・ミレディ、真の淑女である美冬さんはそのことを知っていた。だからこそ、家柄にも校則にも縛られることなく、彼との絆を深め、守り抜き、己の意志を貫き通した……そうでしょう？」

何とも答えようがない。私は「……はあ」と曖昧な返事をする。

「今、女子学部^{フロレス}が成すべきは、彼らと対等な目線に立ちうる真の強さと優しさを持った女性の育成です。次の世代を担いうる新しい時代の淑女を、一人でも多く世に送り出す。既成概念や形骸化した規則に惑わされることなく、物事の本質を見抜き、正義を貫く、強い心を持った聖母^{マドンナ}を。」

……今後、太転依という異種族との『共存』を強いられる未来はおそらく、我々の予想を超えて混沌としたものになる。そこに愛ある秩序をもたらさなければ、我々の未来に光はない」

いくら何でも、私や裕理を過大評価しすぎだ。言葉も大仰すぎる。

けれど、未来に予想される混沌と、愛を伴う秩序が必要だと仰ったことそれ自体は正論だろう。私も、鶴との関係の中でおぼろげに考えていたことだ。

その思いを込めて頷くと、多嘉山理事も私に微笑みを帰してくれた。

「ならば、まずは第一步を……同じ創聖学院という組織の中にいながら、女子学部^{フロレス}だから

一般学部だからと互いの間に壁を作ってきた時代を終わらせなければ」

「それで、せめて卒業を迎える来年の春までは、どうしても如月美冬が必要だと……」

「はい。あなたのお父様に無理を言つて、復学を許して頂きました」

「いやはや。この行動力、そして決断力。その過程にいさか偏りや勘違いがあることを考慮しても、さすが三代前のミレディにして女子学部理事を務める才女と言うべきか。」

「前置きが長くなりました、本題に移りましょう。……美冬さん、例の計画です」

「何か、進展があつたのですかね？ 根回しはどこまで進みましたか？」

「全て終わりました」

「は？ たしか前回お話した時は、どんなに早く見積もつても一ヶ月以上かかると」

「……先に、私は言いましたよね。市井にも立派な男性はたくさんいる、と」

多嘉山理事が、微笑む。その微笑みは尋常なものではなかった。優しすぎるというか、やわらかすぎるというか。

一言で喻えるならば、まるで――。

「理事長からも、両学部の校長からも、そんな案は呑めないと却下されたのですが……駄目で元々と、河合玄造理事に例の計画の概要をお話したのです」

「ああ、はい。アメリの……河合さんのお父様」

「彼は、それは素晴らしいことだと賛同して下さったんです。各所への根回しを買って出て……それがつい、昨日のこと」

「き、昨日?! そんな馬鹿な、有り得ません。教授会、教諭組合、校長、理事会、理事長、出資元の企業やOB、OG、PTA、行政法人や文科省もです。創聖学院の成り立ちは複雑で、組織も一枚岩ではない。ただ書類を回すだけでも相応の時間が……」

「彼は、私の目の前で、電話一本で、あつという間にやってのけてしまいました」

多嘉山理事が、目を細める。

私にはわかる。その目は、確かに――そう、確かに。紛うことなく。

恋する乙女の、それだった。

「私は狭量だったのです。先入観にとらわれ、彼のことを誤解していた。あんなにも頼りがいのある男性だったなんて。いざとなればあれほどの辣腕を振るう人だったなんて。例の計画が実現に向けて動き出したのは、ひとえに彼のお陰なのです」

「あ、あの、すみません、多嘉山理事」

「何か？」

「念のため、言わせて頂きますが……。河合理事は、妻帯者です」

「？ ええ、知っていますよ。それが何か？」

――まさか、自分の気持ちを自覚していないのか？

「い、いえ、何でもありません。失礼しました」

この藪をつつけば、出てくるのは蛇では済まないかもしれない。知らぬ振りをしておくべきだ。私は自分に言い聞かせ、確信に近いその直感を忘れ去ることにした。

「さあ、美冬さん。さっそく今日から始めましょう。計画を実行に移すのです。あなたは今日から、一般学部の生徒になるのです！」

女子学部も一般学部も、一限の講義は九時から始まる。

創聖学院は両学部とも、学年やクラスの区分がない完全単位制だ。強いて言えばS・A・B・Cの四段階に別れたカリキュラムの区分が学年の代わりと言えなくもないが、その課程を二年で修了してしまう場合もあれば、五年かけて卒業できない者もいる。創聖学院の英名は Sohsei Experimental Academy of Learning と言うのだけれども、こうした特異な制度を採っていることそれ自体が、文科省の模索する次世代教育課程を実践する実験校たる所以だ。

生徒たちは最終的に短期大学卒業と同等の資格を得るため、設備もそれ相応のものが揃えられている。学舎の持つ雰囲気は「教室」というより「キャンパス」と言った方が相応しい。

ただ、良家の子女が寝食を共にする全寮制の女子学部と、中流家庭出身の生徒が多い男女共学の一般学部では、運営予算が文字通りの桁違いだ。

「女子学部が宮殿なら、一般学部はプレハブだ……か。口の悪い者はよく言うが、確かにそれくらいの落差はあるな。同じ学院のキャンパスだというのに……」

カーテンを閉めきった、誰もいない一般学部の講義室を見渡しつつ、私は独り呟く。多嘉山理事の指示を受けてすぐ、可能な限り人目を避けてここへやってきた。私の潜入準備室として河合理事が用意してくれたものだ。千人を優に超える総生徒数に対して敷地面積が手狭になりつつある一般学部では、この部屋ひとつ空けるのも結構大変なことらしい。

「つまり、この講義室は日常的に使われている……ということだよな」

ミレディである私は部分的に女子学部教諭を超える権限を持たされているから、自分が必要と思えば一般学部の学舎へ自由に出入りできる。けれども、たいていはソファしか置いていない応接室で校長、教頭、教授、理事らと話すだけだ。こんな風に講義室をまじまじと見たのは、今回が初めてだった。

「傷ついて汚れが落ちきらないホワイトボードに、化粧板の欠けた机か。……こんなもの、女子学部では絶対に使わないぞ」

安価な量産品だと見ただけでわかる。いくら予算がないと言っても、この程度の備品や机なら買い換えられるだろうに。インテリアは学生たちのやる気に影響してくるのだから、綺麗なものであるのに越したことはない。

今度の総会で進言してみるべきだろうかと考えながら、私は試みに手近な席に着く。

「む……？ 以外と座り心地がいいな、この机……」

安普請な割には、実用的だ。強度も充分。

もしかすると「もったいない」の精神を元にエコロジーを実践しているということなのだろうか。机本来の機能には問題がないから、みすばらしい備品をそのまま使い続けているのか？

確かに、講義室の壁面に貼られた壁紙ひとつ取っても、装飾過多で貴族趣味の女子学部と、質実剛健で庶民派の一般学部という明確な方向性の違いがある。

「清貧を潔しとするのが、私たち日本人の文化ではあるが……」

こうあるべき、という理想や理屈ではなく、最低限度必要なものをまず掴み、そこを基礎にすべてを発想していく。そう思えば、この講義室の有り様にも納得がいく。

我々女子学部は、こうした小さな部分から考え直す必要があるのかもしれない。

「ああ……だからか。裕理の経済感覚が時に真を突いてくるのは、それでか」

ふと、婚約者のことを思い出す。私の何気ない一言に「それはお金持ちの発想だよ」とか「普通でいいから」と突っ込んでくる、少し困ったような風の愛嬌のある顔。

それはきつと、市井に根ざしたこの学舎で磨かれてきたバランス感覚なのだろう。

「そう、彼はきつと、この学舎で学んできた……。ひよつとしたら、この机に座って……」

今頃もこの学舎のどこかで、私がすぐ近くにいるとも知らずに講義を受けているはずだ。もしも今連絡したら、彼はどんな反応を返すのだろう――。

「ちよつと、みつふいー。何をニヤニヤしてんのさ」

「――うわあつ?!」

講義室は無人だったはずなのに、いきなり声をかけられる。驚き、声がした方へ慌てて振り向くと、すぐ近くに河合アメリカが立っていた。

「お、脅かさないでくれないか、アメリカ……。口から心臓が飛び出すかと……」

私の友人で、婚約者である裕理の幼馴染。そして、例の計画の推進力になった河合玄造理事の愛娘。案内役としてこれ以上の適任者はいない。私の方から指名し、一限の講義を欠席して来てもらったのだった。もちろん、多嘉山理事と河合理事の了解も得てある。

「しかし、いつからこの講義室に居たんだ、アメリカ。どこかに隠れていたのか?」

「ううん、今さっき来たばっか。そーつと講義室の扉を開けて、抜き足差し足で近寄つて」

「……私を驚かそうとして、まんまとしてやられた訳か」

はははと、声を上げて笑ってしまった。それなりに武術を嗜んできたこの私が、好いた男性を思い焦がれて、のぼせあがつて、その気配に全く気付かなかつたという訳だ。

「いやいや、驚かすつもりはなかつただけど。みつふいー、お忍びでここに來てるんでしょ? 軽く事情は聞いたから、こつそりひつそりしてなきや駄目かなつて。ここに来るまでの間もずつと、壁に張り付いてカニ歩きしながら何度も後ろを振り返ってきたから」

「……………」

「あれ、何よみつふいー、そのシブい顔。あたし何か変なこと言つた?」

「……変ではないと思つている君の方がどうかしている」

「何で? みつふいーの要求通りじゃん?」

「確かに私は『一般学部^{スライトリ}の皆に迷惑をかけないよう内密にしたい』とは言つたが……」

「でしょ? あたしがここに入つてくのを誰かに見られたら、みつふいーがここに居るつてバレちゃうかもしれないじゃん。それとも『フロアレスのミレディがここに居るよ!』とかつて叫びながら來た方が良かった?」

「どうしてゼロか百かの極論になるんだ……。アメリカは一般学部^{スライトリ}の生徒として、普段通りについてくれればいい。必要以上に周囲へ気を配りつつ講義室へ忍び込むのは不自然だ。傍目から見れば『ここには皆に内緒にしておきたい何かがあるんだぞ』と喧伝しているようなものだしな」

アメリカが目丸くする。驚くような要素など、どこにもないはずなのに。

「言われてみれば、超納得。その発想はなかつたよ。いやはや、さすがみつふいー」

「私の方こそ、どうして君がそんな発想をしたのか理解に苦しむよ……」

「でもさー、みつふいー。あたし詳しい話とかぜんっぜん聞いてないんだけど、ナビ役とか秘密の計画とか、一体全体どーいう話なワケ?」

「順を追つて話すよ。そのためにこの場所を借りたのだから」

私は、多嘉山理事が密かに進めている改革と、例の計画について話し始めた。

「女子学部^{フローレス}の改革と言うと仰々しいが、つまり、学院外との接点をもつと増やそうということだ。その中で女子学部^{フローレス}は多くのことを学び、自己の閉塞性に気付いてゆるやかな改革の道を歩んでいくはずなんだ」

「なるほどなるほど。うん、わかる。それはいいことだと思うな」

「しかし、それで良い方向にばかり進むとは限らない。こう言つては何だが、市井にはろくでもない人物もたくさんいるだろう？ 何事も斜に構え、努力をせず、己のことは柵^{かざり}に上げて他人を嘲^{あざわら}り、手を抜いて楽をすることばかり考えるような」

「あ、あれ、どうしてかな。あたし、微妙に胸が痛いんだけど……」

「いや、アメリカはかなり真面目な方だと思うよ。ひよつとしたら自分のことかもしれない、そんな風になつてはいけなさと受けとめているからこそ「胸が痛い」と感じられるのだから」

「あはは……ありがと、褒められたと思つて素直に喜んでくよ」

「そして、女子学部^{フローレス}の女生徒はそのほとんどが良家の子女だ。箱入り娘として育てられているから、良くも悪くも真面目で純真。質^たの悪い連中の言葉に騙^{たぶ}されることは充分考えられる」

「なるほど、改革じゃなくて改悪になっちゃう訳だ」

「それを防ぐためには、目的意識^{ビジョン}が必要だ。女生徒全員が、市井の人々から学ぶべきことと学ぶべきでないことをはっきりと自覚する。そうすれば過ちなどは起きようがない」

「うんうん、やつぱ夢とか目標とかは必要つてところかな」

「だが、今現在の女子学部^{フローレス}が、内々で集まつてそれを模索しても意味がないんだ。我々の発想や価値観は、想像以上に硬直している可能性があるからな。結局のところ、一人でも多くの女生徒が外部の人々と接して、自ら問題意識を持つよう導くしかない」

「あれ、でもさ、世間の人といきなり関わるのは危ないんじゃないか？」

予想通りのアメリカの反応に、私は微笑みを返して。

「……幸い、創聖学院には一般学部^{スライトリ}があるじゃないか」

「はい？」

「同じ創聖学院の一学部なうえ、所属する生徒のほとんどが近隣からの通学、しかも男女共学だ。信用できる小さな世間^{せけん}と考えていい。ましろの言葉を借りるなら、女子学部^{フローレス}と一般学部^{スライトリ}の共存^{きうこん}かな、まずはそれを成し遂げる。それを足がかりにして世間との交流を深め、次世代の女子学部^{フローレス}にふさわしい新しい価値観を育む土壌を作つていくんだ」

「いやー、在院生のあたしが言うのも何だけど、一般学部^{スライトリ}にもバカみたいな連中いっぱい居るしさ、信用しちやダメだと思うよ？ うちのダディが理事やつてて、ユウミたいなダメ生徒を輩出しちやつたトコなんだから。どうせ共存するなら他にもつといいトコがあんじゃない？」

「多嘉山理事としては、その河合理事と裕理の存在を評価しているんだ」

「えー、そりやないでしょー。……あ、でも、ダメな二人を見てたら、お嬢様たちにちよつとずつ免疫ついていたりするかもしれないけど」

「言葉は悪いが、そういう効果も期待していいだろう。だが、免疫をつけるためのワクチンでも、投与量を間違えれば死に至る病を発症させてしまう。予備知識も心構えもなしに、全く異なる二者がいきなり歩み寄れば、そこには必ず誤解や軋轢^{えんりく}が生まれてしまうから」

「うん、こないだのグラウンド拡張工事とか、いい例だよな」

「そこで、私が指名されたんだ。私は女子学部^{フローレス}の全てを知る人間であると同時に、一般学部^{スライトリ}の生徒であるアメリカや裕理とも親しい。両学部を繋ぎうる最初で最後の人材かもしれない……と」

「確かに、最適な人選だと思うね。みつふいーならナイスなアイデア出してくれそうだし」

「だが、私は一般学部スライトリの詳しいところまではさすがに知らない。どこまで一般学部スライトリに踏み込むべきか、一般学部スライトリとどういう関係を築くべきか、正しい判断ができる自信はない。……そこで、今回の体験入学だ。共存するためにまず何から始めるべきか、きっかけだけでも掴みたくてな」

「うんうん、だいたい把握した。それで、そのナビ役があたしって訳ね」

「ああ、よろしく頼む。転校生だと思つて、いろいろ教えてくれ」

「こちらこそ。面白そうなことに声かけてくれて、ありがとう」

私が差し出した手に、アメリカが応えてくれる。握手。

願わくば、女子学部フロレスと一般学部スライトリがこんな風に手を取り合う日が来るように。

「でもさー、みつふいー。趣旨はわかったんだけどさー」

「まだ何か疑問でも？」

「みつふいーつて、うちの学院ガッコじゃ結構な有名人じゃん。そのまんま体験授業なんかに出ていたら、共存につながるきっかけを掴むどころか、動物園のパンダみたく見せ物扱いで終了、つてことになっちゃうかもよ？」

「それについては対策済みだ。先人の知恵に倣うことにした」

私はスカートの隠しポケットに手を入れ、そこに入れておいた勾玉まがたまを取り出す。

「あ……それつて」

「ここに来る前、ましろに頼んで借りてきた。春先まで裕理が使っていたものなんだが、封じ込めてある術に少し細工をしてもらった」

勾玉を握りしめ、目を閉じる。一般学部スライトリの生徒になりたいと願うだけで変化の術が発動する。

一瞬の後、私は別人への変化を終えていた。女子学部フロレスの制服は一般学部スライトリのものになり、背中の中頃まで伸びていた長い髪は首に触れる程度のボブカットへ。

「術の制限時間はなし。自分の意志で自由に解除できる上、変化した衣服も本物同様ちゃんと実体があるんだ。私は退魔の霊能を持つていないから、いくらでも改良できるらしいよ。しかも、性別を逆転するような大きな変化ではないから、私自身への負担はほぼゼロだとか」

「……………」

「？ どうした、アメリカ」

「ダメダメ、こんなの。すぐみつふいーだつてバレルよ」

「は……………」

「トータルの印象が変わってないんだよ、凛々しくて真面目なお嬢様のまんまじゃん」

「そ、そうか？ 私はそうは思わないんだが……」

「だいたい、シャツをタックインしてる時点でありえない。スカートも長すぎる」

「いや、これは、一般学部スライトリの資料をましろに見せて、指定制服と寸分違わないように……」

「だから問題なの。一般学部スライトリに制服そのまんま着てる女の子なんか一人もいないよ？ んーと、とりあえずシャツ出して、おへそまでボタン外して、スカートもつと上にして」

「い、いや、そんなことをしたら……。風が吹いて、ひるがえれば、下着が……」

「可愛く見えることの方が優先でしょがつ。見せたくないなら自分で工夫しないと」

「そ、そういうものなのか……？」

「一般学部スライトリじゃ、そういうもののなの。……はい、出来た」

「む……こうして見て見ると、確かに、町でよく見かける一般学部スライトリ女子の姿に近くなつたな」

「でしょ？ ほんとは何か、一つ二つオリジナルのポイントを追加してみたいんだけどなー。ほら、あたしの背中のリボンとニーソみたいの。でも、そんなの用意してるヒマないもんね」なるほど。自由奔放に見えて、一般学部にも色々スライトリと作法があるということか。

「アメリカが居なかったら、違和感に気付かなかったな……。助かったよ」

「うーん、でも……おかしいな、何でだろう。それでもやっぱトータルするとみつふいのイメージが抜けきらないんだよねー。勘の良いヤツならピンと来るんじゃないかなあ」

「いや、私はそう思わないぞ、ここまで来ると本当に別人だと思うが」

「あ、そうだ！ 顔がほとんど変わってないからだ！」

「そうなのか？ ましろは確か、顔の造作も少しずつ変化させていると言ったんだが……」

「顔のツクリじゃないんだよ。表情つて言うのかな？ キリッとしてる雰囲気。ちよつと口を開いて喋りだしたら、いつも通りのクールビューティーなみつふいーそのもののな」

「それは……もう、どうしようもないことだろう。神通力で私の性格まで変えられるはずがない。女性に変化した時の裕理もそんな感じだったしな」

「いやいや、せっかく体験入学しに来たんだから、一人でも多くの人と触れ合うべきじゃん。いつものみつふいーつて近寄りがたい雰囲気あるしき、もうちよつとこう、庶民レベルの親しさを身につけた方がいいんじゃないかと思うワケよ、あたし」

「正論に聞こえるな。なら、どうしたらいい？」

「いや、あたし、思いついたこと喋ってるだけだもん。どうすればいいか、とか訊かれても」

「……………」

「ちよ、そんなにガッカリした顔しないでよ！ えと……うん、二限の講義が始まるまで、まだ結構時間あるからさ。それまで一緒に考えよ！」

A.M.10:12

「やばいやばい、話し込んでるうちに二限が始まっちゃったよ……!!」

慌てふためき走るアメリカ。私はそのすぐ後ろを追走する。

「あ、アメリカ、もう少しゆっくり……。スカートが、スカートがめくれて……」

「そんなの気にしてる場合じゃないよ！ 蘭ちゃん、遅刻には厳しいんだから！」

「？ 次の講義は、蘭准教の教鞭なのか？」

「そうだよ、日本史！」

「もしや、裕理も受講しているのか？」

「とーぜん！」

——裕理と、一緒に、講義を受ける。

そう思った途端、我知らず胸が高鳴り、苦しくなってくる。もちろんそれは、廊下を走り続けているせいではない。

全く、我ながら呆れ返る。そんなに裕理が好きなのか、この胸は。

「ちよつとみつふいー、何笑つてんのよ！ あんたは平気だろうけど、あたしは単位かかってんのよ?! たでさえ一限ブツ飛ばしてるんだから!!」

「あ、い、いや、アメリカを笑っていた訳じゃない。すまない」

そんなことを言う間に、アメリカが目指す講義室に辿り着いたらしい。

「……すつ、すみませんっ！ 遅くなりましたっ!!」

戸を開けて、アメリカが勢いよく中に飛び込む。私もその後に続く。

「くおらあつ！ もう講義は始まってんのよこのボケナス！ 校長だろうと理事長だろうと、一度始まった講義を邪魔することは断じて許さんっ!! 出てけ！」

蘭准教が発した大音声の怒声に、思わず肩をすくめてしまう。

「そ、そんな殺生なこと言わないでよ蘭ちゃん！ 悪気があつて遅れたワケじゃないのに！」

「シャラップ！ 悪気があるうとなかろうと、遅刻した者は欠席扱い！ 単位はあげない！ それがルールよ！ あんたはもう嫌ってほどわかってんでしょうがっ!!」

「そ、そこを何とか！ 寛大なご処置をっ!!」

居並ぶ生徒たちの押し殺した笑いを背に、アメリカが土下座も辞さない勢いで謝り続ける。

それにしても、一般学部は思った以上に厳しいようだ。女子学部は全寮制ゆえ仲間意識が強く、教諭や教授もおおむね生徒に優しく接する。こんな風に生徒が怒鳴られている光景を、私は今まで見たことがなかった。

「？ ちよい待ち。河合の後ろにいるコ、どこの誰？ 見たことない顔だけど」

蘭准教が、後ろにいた私に気付いて指差してくる。

「え、えつと、このコは、体験入学……じゃない。その、転校生で」

「は？ 転校生がいるなんて話、聞いたことないわよ」

「え、えと、ちよつといろいろめんどくさい事情があるらしくて、ダディから直に面倒見るように頼まれて……つてくらいは、言ってもいいんだっけ？ いいよね？」

「じゃあ、あとで河合理事にでも訊いてみりゃいいのね。……ひよつとしてあんた、そのコにいろいろ案内してたから遅くなったとか？」

「そ、そう、そうなんです、そういうことなんだけど」

「ほう。そういう事情なら許してやらんでもない。河合、席につきなさい」

「……た、助かった……」

安堵したアメリカが、胸を撫で下ろしながら受講生の席に向かう。後ろの方の男子生徒が、こっちの席が空いているぞと手招きをしているが——ああ、裕理だな。遅れているアメリカのために席を確保していたんだろう。

都合良く、そのすぐ後ろに空席があった。

私もアメリカに続いて、裕理の後ろの席に着こうとしたのだが。

「あー、ちよい待ち。その新顔」

蘭教授に呼び止められた。

「私、まだあんたの名前聞いてないわ。せつかくだから自己紹介していきなさい。今この講義室にいる連中にアピールしときゃ、河合の他にも友達とか作りやすいでしょ」

——チャンスだ。

勾玉による変化が完全かどうかテストするのに加えて、アメリカと話し合った『庶民階級の作法に則って親しみやすさをアピールする方法』をここで試す。蘭准教と裕理が私に気付かなければ、恐らく、一般学部で私の正体を見抜ける者など居ないだろう。

私は息を大きく吸い、気持ちを整え、教壇に立つ蘭准教の隣へ立つ。

そして。

「きやるるゝん☆ あたしみつちゃん、よろぴくりゝん☆」

満面の笑顔で、身振り手振りをつけて、片足を勢いよく跳ね上げた決めポーズと共にそう言う。謎の擬音を高い声で可愛らしく言うことで好感度アップをはかり、皆が気軽に呼べるニクネームをあらかじめ自分から伝えることで心理的な壁を外しつつ、存在感をアピールする。ミレディの如月美冬だと悟られることなく、かつ、体験入学の妨げにならないよう一般学部の空気に馴染む。二つの命題を完璧にこなした非の打ち所のない挨拶だ。

——完璧なはず、なんだが。

「そ、そう……。みっちゃん、って言うんだ。ふうん……」

蘭准教。何故、頬の筋肉が痙攣しているのですか？ それに、講義室の皆は何故そんなに静かなんだ？ 裕理、どうして君は私を見つめて絶句しているんだ？

それより何より。

「ぷ……く、くく、くく、くく、ひひ、ひひひ、くく、ま……まさかほんとに……くく」

アメリ。どうして君は笑いかみ殺している？ これは、君と私で考え出した挨拶だろうか？

二人の努力の結果だろうか？ 講義室が爆笑の渦に吞まれるはずじゃなかったのか？

解せない。

A.M. 11:01

蘭准教の講義が終わる。生徒たちが私を避けつつ講義室を出ていく。

ついさつきまでアメリと親しげに話していた裕理までもが、私の接近に気付くと所在なさげに落ち着かない態度を取り、申し訳なさそうに背を向けて去っていった。

少なくとも彼は、みっちゃんが如月美冬だとは気付いていないようだ。

「いやー、ごつめーん。あたしも最初はマジメに考えてただけどき。みっふいーがあんまりにも真剣な顔してあたしの話を聞いてくれるもんだから、途中でこう、ムクムクと悪戯心が湧いてきちゃって。みっふいーったら、あたしなんかの言うことを一体全体どこまで信じる気なのかないって。うん、最後の方はほとんどギャグで……いくら何でも途中で気付いて〃そりやないわ！〃って突っ込んでくれると思ってたんだけどね。あの挨拶も絶対変だあーってとつくに気付いてるはずだって。まさかほんとにそのまんま……っていうか、みんながあんなにドン引きするなんてほんつとに思ってた。ごめんね、ほんと、ごめん。ごめんなさい」

——アメリ。一つだけ言わせてくれ。

ごめんて済んだら、警察は要らないんだ。

P.M. 00:38

三限の講義が始まる。女子学部フローレスの講義は一般学部スライトリのものより数段高度なものだから、教授や教諭に何を質問されてもすぐに答えられる。

「すごいな、君は……。普段からしつかり勉強してるんだね」

私の前に座っていた裕理が振り向いて、感心した様子で言ってきた。

さつき、私がすぐ側に座ると言った時、あんなに嫌そうな顔をしたのに。バンド活動で忙しい親友の三九郎がいつも使っていた指定席に座って欲しくないと言外に訴えていたのに。やはり学生の本分は勉強にあるということか。真面目に勉強をしている者の評価は高くなるものなんだな。

ああ、でも、裕理。それは、普段の君の顔じゃない。いつもの君はもつと優しいんだ。心に直接届いてきて自然と嬉しくなる、そんな笑顔を見せてくれるんだ。今みたいに「変人だと思ってたけど、結構まともなんだね」なんて言わんばかりの、戸惑いとも苦笑ともつかない微妙な顔をしたことなんて、一度もないじゃないか。一度も。

いや、しかし、しかしだ。それはきつと、裕理の中で如月美冬が特別な存在だからなんだ。今の私は変人転校生のみっちゃんだから、如月美冬に向けるのと同じ笑顔を見せてくれる訳がない。でも、でもな、裕理。たとえそうだとしても、私は君に微笑みかけてもらいたい。ごく自然に君の隣にいるアメリカと同じ程度でいい、友達扱いしてくれている親しげな顔を向けて欲しいんだ。

「あ、あの、裕理さん。もうすぐお昼ご飯ですよ。一緒にしませんか？」
意を決して、誘ってみた。

「えつと……ごめん。僕、婚約者……彼女がいて、今日はそのコと一緒にお昼する予定なんだ」
裕理。如月美冬は君と、そんな約束をした憶えはないぞ。

P.M. 01:00

四限の講義が終わって、昼休み。

裕理は挨拶もそこそこに、私とアメリカの前から姿を消した。

「ちよつと、みつふいー。そんなに落ち込まないでよ」

「簡単に言うんじゃない。こんなことになったのは一体誰のせいだと思っているんだ」

「……ごめん、ほんとにごめん」

アメリカが暗い顔をして俯き、震える声で謝る。

「あ、いや……そんなに責めている訳じゃない。君の悪戯にまんまと乗せられた私も悪いんだ」

「……ごめん……」

しまった、いくら何でも怒りすぎた。泣きそうになっているじゃないか。アメリカは私と裕理の関係をとり持ってくれた恩人だというのに、大切な友人なのに。

「いいから、顔を上げてくれ……。ああもう、参ったな……」

本気で落ち込み始めたアメリカにかける言葉を探していると、マナーモードにしていた携帯が不意に震え始めた。メールの着信だ。

差出人は、泉戸裕理。

驚いた私は、慌ててメールの文面を開く。

『美冬さん、どうしよう。僕、何か変なコに気に入られたらしくて……新入生なんだけど、変に熱っぽい目でじつと僕のことを見てくるんだ。何かヤバいと思って逃げ出してきたんだけど、そっちに行っている？ 美冬さんの側でとにかく落ち着きたい』

嗚呼、なんということだろう。裕理、それは私だ。私なんだ。君が逃げようとしているのも、安らぎを求めてメールしてきたのも、どちらも私なんだよ。

私はどうすればいいだろう？ 今すぐにでも如月美冬に戻りたいが、みつちゃんの評判が最低なままだと、私の体験入学は文字通りの拷問のまま終わってしまう。こんな精神状態で、女子学部と一般学部の共存につながる手がかりを探すことなんか出来ない。

「……みつふいー、何て返事するつもり？」

アメリカ。私を心配してくれるのは有り難いが、他人の携帯を覗き見しないでくれ。

私はしばし考えて、次のようなメールを裕理に送った。

『新入生なら、きつと心細い思いをしていることだろう。そんな風に毛嫌いするのは良くない。裕理らしくないじゃないか。お昼を一緒にして、優しく接してあげるべきだと思うぞ。それに私は、今、忙しくて手が離せないんだ。すまない』

そのメールを送ってわずか三分後、裕理は私とアメリカの元に戻ってきた。

「美冬さんが……僕の大事な人が、新入生には優しくしてあげるべきだつて」

私の知っている裕理らしい、本当に優しい笑顔で、そう話しかけてくれた。

「ユウの中で、みつふいーの意見はそれだけ重いんだね」

アメリカが感心した風で言う。しかしこれは喜ぶべきなのだろうか？ 裕理を騙して引き返すよう仕向け、その隙に少しでもみつちゃんの私の好感度を上げておきたいと考えた自分を恥じるべきではないのか？

「そういや、みつちゃんの背丈つて、美冬さんと同じくらいだね」

急に、裕理が言ってきた。

なるほど、どうにも苦手なみつちゃんの中に如月美冬との共通点を見いだすことで、少しでも好意を持てるように考えたのか。それとも、如月美冬に会えなかった寂しさから、みつちゃんの中に私との共通点を見つけて自分を慰めようとしているのか。

どちらにしろ、裕理が私に優しく語りかけてくれるのは、やはり理屈抜きで心底嬉しい。

「……不思議だな。みつちゃんつて、どこか美冬さんに似てる気がしてきた」

こら。裕理。待て。今の私はみつちゃんであつて如月美冬ではない。そういう笑顔を向けるな。その笑顔は、如月美冬のためだけにあるはずだろう。

「あ、あれ……何でかな。そう思ったら、何か、胸の鼓動が……あれ？」

止せ。止すんだ裕理。やめろ。みつちゃんと如月美冬は似てなんかいない！

「ぎやるくん☆ みつちゃんうれぴー。裕理君のハートをゲットしちゃったかも☆」

——思わず口走った瞬間、裕理は三步下がって私から距離を取った。

そう、これでいい。これでいいんだ。君にとって特別な存在は如月美冬だけでいい。

そのはずなのに、何故だろう。裕理の『うわ、キモッ』と言わんばかりの顔を見る度に、私の心は傷ついてズタズタになっていくんだ。

「……あのさ、みつふいー」

落ち込む私の側に、アメリカが寄り添ってきて、声を落として話しかけてくる。

「いつそユウには全部教えちゃえば良かったんじゃないの？ あいつ、女子学部フローレスの事情とかもわかってるし、いろいろ協力してくれたんじゃないかな」

はっ?! そ、その手があつた！

「い、いや待て……駄目だ。裕理と私の仲は、すでに創聖学院全体の知るところとなつているんだぞ。新入生のみつちゃんと裕理がいつも通り、婚約者フイアンセのような親しさをうつかり垣間見せようものなら、妙な噂が尾ひれをつけて広まりかねない」

「あー、ユウつて誤解されやすい星の下に生まれてるしね……」

「それに、みつちゃんが如月美冬だったと裕理に知られたくない。今後、彼が私を見る目までもが変わつてしまいかねないからな。それは死ぬより恥ずかしい。嫌だ。耐えられない。未来永劫、みつちゃんと如月美冬は別人であつてもらわなければ困るんだ」

「複雑なおトメゴコロだね……。頑張れ、みつふいー」

ああ、頑張るよ。頑張るとも。

——本当は、こんなことで頑張るつもりはさらさらなかったんだが。

P.M.01:08

一般学部では、食堂に入る前に食券とやらを買わなければならないらしい。五台ほど立ち並ぶ自動販売機の前には、すでに行列ができていた。

なるほど、全日制ならではの制度なのだろう。全寮制の女子学部では学費の中に食費も折り込み済みだから、こうした手続きは必要ないんだが。

「みつふ……みっちゃん、何が食べたい？」

アメリカが訊いてくる。

「そうだな、私はさほど空腹ではないから……む？」

ふと、自動販売機の列の外れにある人だかりが気になった。

「あれはね、一般学部に入入りしてるパン屋さんの購買だよ」

私が入り込みをじっと見つめていることに気付いて、裕理が説明してくれた。

「ずいぶん人気なんだな……なんですネ。その購買とやらは、そんなに美味しいのですか？」

「うーん、割と普通だね。ただ、学食の料理って量が多くて安いってだけ取り柄でさ、そんなに美味しくないんだ。それで、普通のカツサンドやベーグルが飛ぶように売れてっちゃう」

裕理の説明を聞きつつ、私は食堂の中を覗き込んでみた。活況を呈しているが、広さそのものは女子学部の食堂と大差がない。収容人数も同じ程度だろうから、生徒数が千人をはるかに超える一般学部にとっては手狭だろう。

「ふむ、そうした総合的な評価が購買の人混みに表れている、という訳だ……ですね」

「そうだね。小遣いに余裕があれば、学院の外にある定食屋とかに行っちゃう場合もあるな」

視線を校庭の方に移すと、木陰の下に女生徒らが集まってビニールシートを敷き、弁当を広げていた。その様子を見る限り、自宅から持参してきたものだと思う。

「食堂に購買、外食、弁当の持ち込みか……。選択肢が多いんだな」

女子学部の昼食は、朝食同様、食堂の提供してくれるbuffetのメニューになる。それを弁当にパッケージングして戸外へ持ち出せるようにするサービスもあるが、すべて食堂が用意しているという点において、選択肢は存在しないと言っていい。

「あの……それでしたら、今日の昼食はみんなでパンにしませんか？ あんなに混んでいる食堂であまり美味しくない食事を慌ただしく摂るくらいなら、青空の下で談笑しながらの方が」

建設的な提案をしたつもりだったんだが、アメリカが渋い顔をする。

「あのね、みっちゃん……。今言ったことって、みんな考えることなんだよ。だからああやって、購買に群がってるワケ」

「ええ、わかります。だから私たちも……」

「却下、却下」

「どうしてですか？」

「だから……ああもう、説明するのめんどくさいなあ、どう言えば伝わるのかな」

「……そんなにパンが食べたいなら、僕が行ってこようか？」

裕理が急に言い出したが、アメリカが手で彼を制する。

「いや、これも経験かもしれないよ。ね、みっちゃん、実際に購買へ行ってパン買ってきなよ。もし無事にパン買って来られたら、あたしらも同じようにする」

何だかよくわからないが、私は言われた通り購買の方へ行ってみることにした。

「……メニューすら見えないじゃないか」

離れて見ていた時は気付かなかったが、購買の前に群がる人の数は尋常ではない。女子としては高い方であるはずの私の背丈でも、視界に移るのは制服の背中ばかりだ。

しかも皆、行儀良く順番待ちしているようには見えない。

「おばちゃん、カツサンドちょうだい、カツサンド！」

「ミックスサンドセットは売り切れ、売り切れだよ！」

「菓子パンの会計はこっち、こっちだつてば！ 押さないで！」

怒声にも近い声が、制服の背中ごしに聞こえてくる。

「まずはこの人混みをかきわけて、パンの売り場に辿り着かなくてはならないのか」

ようやく購買の販売制度を理解した私は、人混みの中へ足を踏み入れた。

——途端に、弾かれるようにして外へ押し出された。

「邪魔よバカ！ 何をチンタラしてんのよ！ 下がつてな！」

私を弾き出したのはどう見ても下級生、しかも女子だ。

いささかムツとした私は、その下級生女子を押し退けるようにして再度人混みの中に足を踏み入れる。それでも体力には自信があるし、本格的な武術の稽古には一対多数で揉み合うような乱闘を採り入れているものもある。この人混みに負けるはずは——。

「あ痛っ!!」

誰かに足を踏まれた。

「こ、こら……お、押すな！ く、苦し、っ……」

押し合う人々の圧力が、私の上半身と下半身を違う方向に持つていこうとする。

「く、う……ううう、うっ……こ、購買は、一体、どっちに……」

途中からすっかり方向を見失い、私はただ人混みに揉まれるばかりとなった。

「だ、駄目だ、そ、外に……一旦、人混みの、外に……」

しかし、どちらに行けばこの人混みから離れられるのかさっぱりわからない。

数分後、体力を奪われ疲弊しきった私は結局、人混みから弾き出されてしまった。

「……だから、止めときなさいって言ったんだよ」

溜息を吐きつつ近寄ってきたアメリカが、ふらつく私の身体を支えてくれる。

「な、何だ、これは……。まるで、天から垂れた蜘蛛の糸に群がる餓鬼のような……」

「あー、ナイスな例えだね、それ。確かにそんな感じだ」

「一般学部^{スライトリ}の皆は、毎日こんな闘争を繰り返しているのか……？」

「どーしてもパンが食べたい時は頑張つて戦うしかないけど。ま、気の利いた教授とかなら、昼休みの数分前に講義を終わらせてくれるだけどさ。本来の休み時間前に到着できたら、普通に並んでパンが買えるから。でも、無事に買えたとしても、購買から離脱するのが遅れたら……」

「人混みに揉まれて、さっきのように死にかけるのか?！」

「死にかけるつてのは大袈裟だけど、脱出できても手元に買ったはずのパンを持つてなかったりするよ。落つことしたり、ぶん奪られたりして」

何と言うことだ。まさに弱肉強食、競争社会の縮図ではないか。

「ちなみにね、ユウはいつでも目当てのパンをゲットしてくんの。そーいうところに変な才能あるのよねー。他人に流されてるようで自分の進むべき道は曲げないっていうか。……ちなみに、さんちゃんだと五勝二敗くらい。あたしは勝率五割以下」

「……みんな、思った以上に逞しいんだな」

少なくとも私は、どんなに鍛えてもあの人混みに打ち勝てる気がしない。

もしや、裕理が三強の太転依を前にしても怯むことなく立ち向かっていった秘密はここにあったのだろうか。アメリカが応龍に対して一步も退かずに対等な関係を築くことができたのも、この購買で胆力を磨いていたということか。

そう考えると、何となく腑に落ちた。

P.M.01:20

結局私たちは、食堂で昼食を摂ることになったのだが。

「……しまった、財布を落とした」

順番待ちして食券の販売機の前に立ったところで気がついた。さつき購買の前で人混みに揉まれていた時だろう。

「そりやマズいよ。すぐ行つて探してこなきゃ」

隣の販売機に立っていた裕理が言う。

「いや、構わないよ……構わないです。どうせ、大した額は入ってなかったんで」

それに、またあの餓鬼の群れに飛び込むなんて、考えるだけでも気が滅入る。

「じゃあ、今日の昼食代は僕が貸しておくよ。何がいい？」

本当に、君は優しいんだな、裕理。

「君と同じものでいいよ……いいです。同じものが食べたいので」

「了解」

裕理が食券を買い、私に手渡してくれる。それを持って厨房の前に並び、順番が来たらそれをコックに提示、食事を受け取るという流れのようだ。

「はい、カレーうどんね。お待ちどおさま」

コックの中年女性が、私の前に湯気の立つ器を置く。プラスチック製の傷ついた器がどうも気になるが、予算がない一般学部ではやむを得ないことなのだろう。

「？ ちよつと、早くカレーうどん持つてそこ退いて。後ろがつつかえてるでしょ」

何故かコックに叱られた。私に先行して料理を受け取り、席に着こうとしていた裕理も「みっちゃん、どうかしたの？」と訝りながら戻つて来た。

「いや、主菜を受け取るのを待つていたんだが……ですが」

「はい？」

「これは、スープではないのですか？ つまり前菜ですよ？ 主菜があるのでは？」

コックと裕理が、ぽかんと口をあけて私を見つめる。

「い、いや、みっちゃん。そんなものないから。カレーうどんはこれだけ」

「そうだったんですか？ でも、たったこれだけではお腹が空きませんか？」

「たったこれだけで、普通のうどん屋なら大盛りに近いくらいの量があるけど……」

「つまり、主菜は別で単品として注文しなければならない、ということですか」

「い、いや、みっちゃちゃん？ 何を言ってるの？」

「ごめんなさい、私はこういう食堂に慣れていないんです。知りませんでした。……もう一度、食券の販売機に戻ってもいいですか？」

「……まあ、いいけど。お腹空いてるならそう言ってくればいいのに」

とりあえず前菜のスープをテーブルに置き、私は販売機の前に立つ。裕理も付き添ってくれて、自販機にお金を入れてくれた。

「サラダは、これでいいんでしょうか。野菜があつた方が良いと思うので」

「うん」

「とすると、ご飯は、これで……」

「みっちゃちゃん、それ定食だよ？ ハンバーグと味噌汁、漬け物もついてる」

「それはいい。これにします。なら、デザートは……」

「ちよ、ちよつと待つてよみっちゃちゃん。カレーうどんに山盛りサラダ、ハンバーグ定食に加えてデザートまでつけようつての？」

「はい。それで一揃いですよね？」

「……………」

「すみません、コックの方。食券を持ってきたので、給仕をお願いします」

そうして私は、料理を持って席に着く。

「ちよ、ちよつと……みっちゃちゃん、あんたどんだけ食べる気なの？」

先に席へ着き、場所を確保してくれていたアメリカが呆れたように言う。

「さつき、そんなにお腹空いてないとか言つてたじゃん。ひよつとして朝食抜いてたの？」

「いや、朝食はきちんと摂つたが。……では、いただきます」

れんげを手に、スープをすくつて一啜り。

「……ずいぶんと美味だな。もつと繊細な味付けの方が好みなんだが」

不満はあるが、食べられなくはない。麺も頂いた後、続いてサラダを口にする。

「ドレッシングに手間がかかっていない……。野菜も乾き気味だ」

だが、残すのも忍びない。ひとまず全部食べてしまう。

「さて、ハンバーグだが……これは合成肉なのか？」

パサパサで味気ない肉を誤魔化すように大量のソースがかかっているが、このソースも大味で美味しくない。セットとして付属してきた味噌汁も、私が知っているものとは別の料理に思える。味噌の塩気が強すぎて、昆布や鰹の風味がまるでしない。もし女子学部の食堂でこんなものが出てきたら、コックの責任問題にも発展するのは必至だろう。

デザートに関しては、紙カップに入った既製品のヨーグルトだから、特に言及はしない。

「……ごちそうさま。確かに美味しくない。皆がパンの購買に群がるのも納得だ」

箸を置き、紙ナプキンで口元を拭く。

「ん？ どうした、アメリカ、裕理。私の顔に何かついてるか……ついていますか？」

食事を終えた私に、何故か二人は驚きの視線を注いでいた。

「ちよつと、みっちゃちゃん……。あんた、そんなに大食いだったの？」

「大食い？ いや、そんなに食べたつもりはないんだが」

「しかも、グルメキャラだし」

「いや、私は味にはさほどこだわらない方だが」

「……美冬さんみたいだ」

ぽつりと、裕理が呟く。

「僕の婚約者^{フイアンセ}も、そんな感じで……見惚れるような綺麗な箸使いで、黙々とすごい量の料理を食べる人だから」

「え、う……うそ、みつふいー、いつもこんなに食べてるの?！」

いや、アメリカ。そこは驚くところではないだろう。

「うん。最初に女子学部^{フクロレス}の食堂で見た時はびっくりしたんだけど。多分、子供の頃から身体を鍛えてるから、基礎代謝が普通の人と違うんだよ。僕も『君は小食だな』とか言われた」

そうだな、初めて君と一緒に昼食を摂った時、そう言ったな。憶えているよ。

「いやー、ユウって結構いっぱい食べる方でしょ。女の身でその上を行くとかどんだけーって感じじゃん。他のお嬢様とか突っ込まないの? あんた食べ過ぎ! とかって」

「財閥の令嬢に向かってそんなこと言うもんか。如月より格上の家なんてまずないんだから、失礼だと思われたら大変だろ? ……かく言う僕も、面と向かって突っ込んだことない」

「そーいや、いつだったかユウ、言ってたよね。女子学部^{フクロレス}の食事って、めっちゃめっちゃお金と手間がかかって美味しいって。ほら、頻繁に忍び込んだ頃」

「ああ。街であれと同じクラスのもの食べようと思ったら、二千円くらいかかるはずだよ」

「……納得した。そういうのを当たり前だと思つて育つと、こうなっちゃうんだね」

何だ? 二人とも、何を言っているんだ?

「というか、小食の裕理……裕理さんはともかく、アメリカはその程度の食事で保つのか……保つんですか? それとも、一般学部^{スライトリ}には間食の時間が用意されているのでしょうか?」

「そんなものあるわけないでしょ。あたしはこのパスタセットでお腹いっぱい」

「馬鹿な、たったその程度で……」

「ねえ、みっちゃん、周囲よく見てみなよ。みんなトレイに定食だけとか、どんぶり一つしか持つてないでしょ? あれくらいで満足してるの」

「な……?！」

皆、私よりはるかに少ない食事で、あんなに活動的なのか? 餓鬼の群れのような購買の人

混みをかき分けるというのか?!

戦慄するしかなかった。

P.M. 02:00

午後の講義が始まった。グラウンドでスポーツをするのだとアメリカは言った。

ただこれは、いわゆる体育の授業とは少々趣が違う。公立校では保健体育の勉強とセットになって身体を鍛える必須科目として扱われているらしいが、創聖学院においてこの二つは全く別なものだ。保健体育の講義は第二級生^{カリキュラムB}で修了し、第三級生^{カリキュラムA}以上には存在しない。スポーツは教授や教諭の都合でどうしても空いてしまう時間に行われる穴埋めにすぎない。これは、女子学部^{フクロレス}も一般学部^{スライトリ}も同じだった。

ただ女子学部^{フクロレス}に限って言えば、創設以来、英国の寄宿舎学校^{パブリックスクール}を手本としてその制度を整えてきているから、スポーツの時間はかなり重要な意味を持っている。机の上で勉強するだけでは決して学ぶことのできない礼儀作法や忍耐、弱者への思いやり、他者への奉仕、チームワークの大切

さなどなど、スポーツが十全な人格の形成に有効だというのは論を待たない。選択で履修する剣道、合気道、薙刀なぎなたはもちろん、最近ではアーチェリーやラクロスなども人気がある。

「なんか、道具が必要でお金がかかりそうなスポーツばつかな」

私と一緒に、グラウンドの外で見学しているアメリカが言う。私は単純に体操服を持っていないからだが、アメリカはたまたま運動うごができない日ひだったらしい。

「ああ、選択したスポーツごとにユニフォームも違うよ。ああいう共通の体操服はないな」

グラウンドでサッカーボールを追いかけて走り回っている裕理や、その他の男子生徒を指差しつつ説明する。そのすぐ側では女子生徒がバスケットボールに興じているが、皆、半袖にショートパンツという動きやすい格好だった。

「しかし、男子も女子も熱心だな……。卒論や編入学試験を控えた最上級生カリキュラムスは、スポーツをしても単位は出ないはずなのに。そこは女子学部も一般学部も同じだろう？」

現に私も、講義のない時間はほぼ私用に充てている。女子学部の学友たちもそうだ。試験の前になれば、ほぼ全員が自習の時間として図書室などに籠こもることになる。

「別にやらなくていい、と言われれば、人間の心理として何もしない方を選択するだろう。疲れるし、汗もかくのだから」

「人間の心理って……。それ、文系の女の子だけの考え方じゃない」

「こんなことに、文系だの体育会系だの、男女差だのが関係あるのか？」

「あると思うよ？　さんちゃんとかは『ええ天気の日に勉強そっちのけで堂々と遊べる時間なんやで。俺はむしろこの時間のために学院ガッコに来てるようなもんや』って、よく言ってた」

「……なるほど」

「一般学部スライトリって統合前は男子校だったって言うしさ。あたしは共学になってからしか知らないけど、気付かないところで男臭い雰囲気って受け継がれてんじゃない？　……多分」

「男性原理の発露……そうか、スポーツも本来、勝敗を競うことが第一義だものな」

「男性原理って、そんな、大袈裟だよ」

「だが、実際そうだろう。一般学部スライトリ在学生の男女比率は、たしか……」

「六対四くらいだっけ？　確かに男の方がちよつと多いけど、そんなの意識したことないよ？」

私の見ている前で、裕理が同級生のタックルを受けて体勢を崩し、地面に身体を投げ出す。

が、彼は「やったな、こんにやろ！」と笑いながら言い、即座に飛び起きて再びボールを追出した。女子学部フローレスでは絶対に見ることのない光景だ。

——胸が、高鳴る。

こういう男子の姿を見ていれば、女子の考え方も変わってくるのだろうと想像はつく。私も体操服があればすぐにでも着替えて、身体を動かしたい、汗を流したいと思ってしまう。

「ユウはどつちかって言うと、スポーツはあんまり好きじゃなかったんだだけだね。でも、春先からまろまろに鍛えられたせいで、身体動かすのも結構楽しいんだって気付いたらしくて」

「いや、それ以前から素地はあったんだろう。古武術の体捌きを教えた時も呑み込みは早かった。裕理は運動が嫌いなのではなく、それよりも好きなことがあっただけだと思う」

「あー、そうかも。去年までは、スポーツの時間サボっちゃバイクの雑誌読んでたよ」

「……やはりな」

「さすがみつふいー、ユウのことは何でもお見通しってカンジだね」

からかうように言ったアメリカの言葉を、私は半分も聞いていなかった。

フ
ロ
ー
レ
ス
女子学部
に欠けているもの——ス
ラ
イ
ト
リ
一般学部から学ぶべきものが、見えてきたから。

P.M. 02:44

スポーツの見学を途中で止め、私とアメリカは人気がない林の中に入っていた。

「へ？ フ
ロ
ー
レ
ス
女子学部に戻る？」

「ああ」

「でも、まだ六限の講義とか、サークル活動とか……」

「必要ない。目的は達成した」

言いつつ、私は勾玉を握って変化の術を解除する。

長い髪、いつもの制服。やはり、私は如月美冬の姿でいるのが一番落ち着く。フ
ロ
ー
レ
ス
女子学部
に忍び込んでいた頃の裕理もきつと大変だったのだろう。今なら身に染みてよくわかる。

「目的は達成した、つて……じゃあ、体験入学は今日でおしまい？」

「みっちゃんはフ
ロ
ー
レ
ス
女子学部に移ることにしたいとか、適当にごまかしておいてくれ。必要があれば、また多嘉山理事や河合理事を通じて頼むよ」

「そっか……。あつという間だったね」

「いや、私にとつては充実した有意義な時間だったよ。有り難う、アメリカ。助かった」

「……ごめんね」

「どうして謝る？」

「いや、その……いろいろと。あ、そうだ。みつふいー。良かったら携帯の番号教えて」

「ん？ どうして」

「あたしら、今までユウが絡んでる用事がある時しか話したことなかったじゃん。今日みたいに、普通に友達みたいな感じで話したことなかったからさ」

「ああ、そういうことか。……構わないよ、時間のある時には電話してくれていい」

「ありがとう。じゃあ、また今度話そうね」

「ああ、そうだな。ただし、もう二度と君の悪戯には乗せられないぞ？」

「ちよ、ちよつと、そういうこと言う？ 忘れてよう、ほんとごめん、ごめんなさい」

「ははは……。当分はこの話で君をからかえそうだ」

「……戻ったら、何するの？」

「今日のことをレポートにまとめる。それが終わり次第、多嘉山理事に報告だ」

「大変だね。……がんばってね」

「ああ、ありがとう」

アメリカに見送られて、私はフ
ロ
ー
レ
ス
女子学部の通用門へと歩き始めた。

P.M. 04:48

「我々は、あまりに脆弱です。恵まれた環境に甘え過ぎています」

多嘉山理事の執務室で、私は持論を展開し始めた。

「一般学部の生徒たちはカリキュラムの内外で、困難な局面に抗い、生き抜く力を養われています。我々の想像をはるかに超えて彼らは遅しく、力強い。一方の我々は、女子のみの環境の中で、

女性原理から発する優しさに無意識のうちに浸りきっています。そして、それを肯定しすぎている。男性原理に基づく弱肉強食の競争社会、その苛烈さを、すべての女子学部^{フローレス}在學生は知るべきでしょう。そして痛感してほしい。こんな温室育ちでは、これからの混沌とした世には決して通用しないのだと。……これが、本日のレポートです」

私は取り急ぎまとめたレポート用紙を、多嘉山理事の眼前、その机上に置く。多嘉山理事はそれを手にとってぎつと目を通し、鷹揚に頷く。

「結構です。さすがは美冬さん、すばらしいレポートです」

理事が微笑む。が、私をまっすぐ見つめるその目は真剣そのものだ。

「たつた一日でそれほどの成果が得られるとは、体験入学はかなり有用な手段だと思って良いでしょうね。今後、監督生^{プリフェクト}らを中心に一般学部^{スライトリ}へ……」

「いえ、理事。それは早計です」

「？ 何故ですか」

「たとえば獅子であつても、幼いうちに狼の群れへ送り込まれば無事では済みません。先も言いましたが、我々は恵まれた環境に甘えすぎているのです。いきなり一般学部^{スライトリ}の一員になると、自らのアイデンティティすら崩壊しかねない。これは誇張ではありません」

「そ……そこまで、ですか。ミレディたる美冬さんをして、そこまで言わせる……」

「まずは、女子学部^{フローレス}全体で一般学部^{スライトリ}と関わることを提案します。最初はその程度で充分。たとえば、秋に行われる体育祭や文化祭を合同で行うのはいかがでしょう。レポートの八項目に、その利点を列挙しています」

「……わかりました。ですが、女子学部^{フローレス}全体となると規模が大きくなります。定例行事を根本的に見直すことになりますから、予算の流れ一つとっても大改革が必要でしょう。実現は困難と思いますが……しかし、前向きに検討します」

「いいえ、多嘉山理事。女子学部^{フローレス}のためにも是非、実現を」

「……………」

「お願いします」

「……どうやら、これは、私の教育者生命を賭けるべき案件になりそうです」

多嘉山理事が、微笑む。楽しそうに。

「ところで、美冬さん。あなたが体験入学をしている間に、私も一つの案件をまとめました。夏期休暇を使って町内会の清掃活動に協力する約束を取り付けてきたのです。こちらは有志のみですし、街に出る時間も限られていますから、実現は容易なはずですよ」

「素晴らしいことだと思います。一般学部^{スライトリ}との本格的な交流が始まる前に、監督生^{プリフェクト}とその候補生らの気を引き締めるいい機会になるはずですよ。もしよろしければ、私が引率を」

「助かります。美冬さんがそう言うってくれるなら、理事会もノーとは言わないでしょう」

多嘉山理事は、私のレポートを机上に置き、椅子から立ち上がる。

「……この女子学部^{フローレス}に、如月美冬が居てくれて、本当に良かった」

その一言で、今日一日の私の苦労は報われた気がした。

P.M. 05:07

夕刻の朱い光を浴びつつ理事執務室を後にした私は、部活動やサークル活動に精を出す女生徒

らの喧噪を背に、女子寮へと歩き出した。

入寮点呼は六時からだが、朝の時と同様、私はその二十分ほど前には寮母や教諭の報告会に顔を出さなければならない。休憩を取れるタイミングは今しかなかった。

「……肩が……」

最近ひどくなる一方の肩凝りが私を苛む。今日は特に、慣れないことの連続で緊張を強いられていたから、余計に気になる。後輩の町田あたりに頼んで、少し揉んでもらおうか。

そう思っていたら、急に携帯が鳴った。裕理からのメールだった。

「そう言えば、今日は一度も私から連絡しなかったな……」

思いつつ、メールの文面を開く。

『美冬さん、今、忙しい？ こっちは講義が終わったところ。今日、まだ一回も顔見てないし、暇なら逢いたい。少しでもいいから』

思わず、笑ってしまった。

「……私は、ずっと君と一緒にだったんだがな」

渡り廊下の柱に背を預け、考える前にOKの意を伝えるためのメールを打ち始めていた。ほんの三十分程度だとしても、いつもの如月美冬として彼と話をしたかった。

そうだ、裕理に肩を揉んでもらおうか。いや、たださえそれはさすがに――。

悩みつつもメールを書き終わり、あとは送信ボタンを押すだけという段になって。

「き、如月先輩！ 良かった、こんなところにいらつしやつたんですね……!!」

後輩の町田ほか、数人の女生徒が息せき切って駆け寄ってきた。

「どうした、何かあったのか」

「ぬ……っ、鶴ちゃんが、鶴ちゃんが……」

P.M. 05:14

鶴は女子学部フロレックスの前庭、植え込みの影に一人で座っていた。

手にはお手玉。頭上にぽんと放り投げては、落ちてくるのを待つ。ただそれだけを繰り返していた。遊んでいる風には見えない。

私からは背中しか見えなかったが、その雰囲気だけでも、機嫌を損ねているとすぐわかる。

「午前中まではいつも通り、誰とでも明るく接してくれて、一緒に遊んでいたんです。でも、午後になってからだんだんと機嫌が悪くなってきた、今は口も利いてくれなくて……」

町田が不安そうに言う。

何だかんだ言って、鶴は『三強』と呼ばれた強力な太転依だ。癪癪をおこして雷撃の一つも落とせば、普通の人間は命にかかわる大怪我を負いかねない。もちろん、今の鶴ならそんなことはしないだろうが、私ほど鶴に懷かれていない町田や一般生徒は怯えて当然。人間同士であっても、怒っている相手と会話が成立しない時は恐怖を感じるものだから。

「ゆみなや、ましろは？ あの二人ならどうとでもしてくれだろうに」

「小鳥遊さんは、美術の教授と一緒に国立公園に素描ドローイングへ。夜にならないと戻らないそうです。戸さんは四時頃から取るべき講義がなくなったとかで、学院の外へ……」

「そうか。今頃は、泉戸家で家事をやっているんだろう」

「相談できる方が誰もいなかったので、どうすればいいのかわからなくて……。すみません」

町田が携帯電話でも持つていれば、あるいは学院外へ自由に電話できる権限を持つていれば、すぐに連絡はついたんだが。女子学部^{フコレス}ではどちらも出来ない相談だ。

こうした融通の利かないところも、いずれは改革していかなければならないのだろう。

「わかった。あとは、私に任せてくれていい。寮にもどつていいよ、町田」

言い置いて、私は鶴の側へと歩み寄っていく。

「……ままか」

あと一間ほどの距離に近付くと、背中を向けたまま鶴が言ってきた。

「ああ、私だよ。気配だけでわかるのか？」

「ままの生気は、どこにおつてもすぐ見つけられるぞ。たつた一カ所を除いての」

「一カ所？ どこだ、それは」

鶴は、その問いには答えてくれなかった。

その代わりに、私に対して妙な質問を投げかけてくる。

「……昼間、どこに行つておつたのじゃ、まま」

どこに、と言われても。

「ずっと学院にいたぞ。仕事をしていてな」

「嘘を申すな」

「本当だよ。あ……そう言えば、朝方にすぐ戻ると言つたまま……。まさかお前、それでへそを曲げていたのか？」

「違う」

「本当にすまない、仕事が長引くとわかつた時点でお前に連絡すべきだったな」

「だから、違うと言うておろうが！ そんなことでへそを曲げるほどわたしは偏屈ではない！」

「？ なら、どうして」

鶴が答えを返すまで、暫し。

「……ままは、ぱぱと一緒に遊んでおつたんじゃろ」

「は？」

「千里眼でも何でも使えば、わたしはすぐにままの居場所を見つけられる。じゃがの、たつた一つだけ例外がある。……ぱぱの側じゃ」

「あ……ああ、退魔の霊能か」

「ぱぱと一緒にだつたのなら、何でもわたしを呼んでくれなんだ。何でもわたしを仲間はずれにするんじや。仕事だの何だのと嘘をついて、わたしを除け者にしておつてからに」

「ち、違う違う、鶴、そうじゃない。確かに私は一般学部^{スライトリ}で裕理の側にも居たが、本当に仕事だつたんだ。そもそも、裕理は私が側に居たことに気付いていないはずだし……」

「……なぬ？ では、本当に仕事だつたのか？」

ずっと背中を向けていた鶴が、やっと私の方を振り向いてくれた。

「ああ、本当だよ。嘘だと思ふなら確認してみるといい」

送信する直前だつたメールを消去して、私は鶴に携帯電話を差し出す。と、ひったくるように私の手から携帯電話を奪い取り、すぐに短縮ナンバー01をコール。裕理と電話を始めた。

「ぱぱか？ うむ、わしじや。聞きたいことがあつての。今日は何をしておつた？ ……本当にか？ 近くにままがおつたはずじゃぞ？ ……知らぬ？ 本当か、本当なのか？ むう」

「これでわかつたか？ 鶴」

「……わかった。ままは本当に仕事だったのじゃな。なら仕方あるまい」

「良かった、機嫌が直って何よりだ。さ、電話を替わってくれ、私も裕理と話が……」
 そう言いかけたところで、電話口の裕理が何事か話しかけたらしい。

鵜は、私の方に手渡そうとした携帯を再び自分の耳に当てる。

「む、なんじゃ、ぱばよ。……ままと話がしたい？ 逢いたい？ ダメじゃ！ わしは今日一日、ままとずっと逢っておらなんだのじゃ！ 一人で寂しく待っておったのじゃ！ これから夜にかけてたーつぷりと遊んでもろうて埋め合わせをしてもらわんと！ 何なら、ぱばも女子寮まで来ると良いぞ。ならば一緒に遊んでやらんでもない。……む？ もう無理？ 勾玉がない？ ましろに返した？ ようわからんが、無理なら仕方がないの。ではの、バイバイじゃ」

言うだけ言つて、鵜が電話を切る。

——ああ。なんということをしてくれた。

「さあ、まま。寮に帰ろうぞ。一緒に遊ぶのじゃ！」

満面の笑みの鵜を見て、私の肩凝りがまた少し悪化した気がした。

仕方がない。今から逢ったところで、三十分も話せないのだから。諦めよう。夜の自由時間に電話をかければ、裕理とはいくらでも話ができるのだから。

P.M. 06:30

入寮の点呼が済むと、食堂に集まって夕食の時間になる。

ローストビーフ、鮭のムニエル、香味野菜のソテーなどなど、栄養価に加えて味や彩りまで考え抜かれた多彩なメニューがビュッフェにずらりと並んでいる。

「……慣れというのは、恐ろしいな」

一般学部スライトリの食堂を見た今では、豪華すぎると感じる。これが当たり前だと思っていた自分の感覚は改めるべきなのかもしれない。もちろん、一度に摂る食事の量についても——。

「あれ……？ 如月さん、今日は体調でも悪いのですか？」

食事の際、いつも隣に座っている首ヘッドガール席の同級生が、不思議そうに声をかけてきた。

彼女の視線は、パスタとサラダしか置いていない私のトレイに注がれていた。

「……今まで君は、私に気を使って、言いたいことを呑み込んできたんだな」

「はい？ あの、如月さん？」

「こういうのを、裸の王様と言うのだろうな……。せめて女子学部フロアレスにも一人くらい、アメリカのようにづけと物を言ってくれる友人がいてくれれば、もっと早くに……」

訝いぶかる同級生に構わず、私は黙々と食事を進める。

——あつという間に、食べ終わってしまった。

どう考えても夜中に空腹で目が覚めそうだったので、仕方なくおかわりをする。

皆が食事をする中、一人で配膳台に立つのがこんなに恥ずかしいとは思わなかった。

P.M. 21:15

食事が終われば、消灯までは自由時間だ。今日の復習をする者、ロビーでテレビを見る者、読書にふける者など様々だが、私は九時を過ぎるまでひたすら鵜の相手をさせられていた。

「ふああ……あふつ。ままよ、わし、もう眠い。寝るぞ……」

鶴が急にそう言い、寮の自室の床に散らばっていたカルタもそのまま、ベッドに上がって身体を横たえる。

「こら、鶴。ちゃんとカルタを片付けろ。寝間着にも着替えて。それと今日こそ、明日着るものの用意をしろ」

注意したが、時既に遅し。

「……ふがー、ひゅー、すやすや、ぴー……むにやむにや……」

「あつという間に夢の中か……。困ったものだ」

仕方なく、眠っている鶴の着物の帯を解き、寝間着に着替えさせる。

「さて、やつと、私個人の時間か」

夕刻よりさらに凝ってきた肩を自分で揉みほぐしつつ、何をしようかと考える。

近々、バイクの免許を取得するために教習所へ通うことになっているから、免許取得のための勉強を始めようか。以前、裕理から借りてきた参考書や問題集も半分ほどしか進んでいないし。

「……裕理、か」

問題集に手を伸ばしかけて、思わず、その名を口にする。

口にしたら、勉強をする気が失せてしまった。

「困ったものだな、我ながら……」

声が聞きたかった。話がしたかった。ただその思いで、携帯電話を手取る。

「おや？ 着信履歴が……」

マナーモードのままベッドの上に置いていたせいで気付かなかった。アメリカの名前が七時過ぎから連続して五件ほど、一分と間を置かず並んでいる。また今度電話すると言っていたが、アメリカにとつての「また今度」は今夜と同義なのか。せっかちな彼女らしい話だ。

思わず笑ってしまったが、こちらも、今日は世話になったと一言伝えておくべきだろう。

『あ、みつふいー？ やつとかけ直してくれたんだ、待ってたよー』

コール音は二度も鳴らなかった。即座にアメリカが電話に出た。

「今日は世話になったな、アメリカ。いろいろありがとう」

『そんなことはどーでもいいんだって。それよかき、みつふいーが落とした財布の話』

「？ ああ、すっかり忘れていた。わざわざ探してくれたのか？」

『忘れていたとか、ちよつと正気?! みつふいーの財布のせいで、一般学部は放課後からちよつとした騒動になってたんだよ!』

「……どうして」

『どうしてもこうしてもないでしょ！ キャッシュで八万も入ってる財布落つことしといて、事件にならないって思う方がどうかしてるよ!』

「別に、カードや身分証の類が入っている訳でもないんだぞ。落ち着け」

言うのと、電話の向こうでアメリカが盛大な溜息を吐く。

『わかった、わかったよ、うん、みつふいーにとってはどーでもいいことなんだよね……。ごめん、いちいち過剰に反応してるあたしがド庶民なだけだから。今度から気をつける……』

「気をつけるって……やめてくれ、君にまで遠慮されたら、私はまた裸の王様になる」

『王様？ 何よ、それ』

「頼む、アメリカ。私には君が必要なんだ。これからも齒に衣着せず、何でも言ってくれ。友達で

いてくれ。今日もそうだし、裕理との仲がこじれた時も……君がいなければ、私はきつと、進むべき道を間違えていただろう。だから……」

『ちょ、ちよつと、何が何だか意味わかんないよ、落ち着いて、落ち着いて』

「……すまない、つい声が荒くなった。今日は、いろいろあったから。自分の中でも今ひとつ、整理がついていないのかもしれない……」

暫時、沈黙が流れる。

『何か、よくわかんないけど……。みつふいーも大変なんだね』

「いや、言うほど大変ではないよ。ただ、少し疲れが溜まっているかもしれないが……」

『あたしで良ければ、愚痴くらい聞くよ？ 女同士だし、ユウには言えないことでも気軽に言えちやうでしょ。遠慮しないで、ばんばん吐き出すといいよ！』

「はは……ありがとう、アメリカ」

こういう風に言ってくれる友達は、今まで居なかったな。

本当に私は、人の縁に恵まれている。有り難いことだ。

『あ、そだ。財布、どうする？ 明日、あたしが持つていこうか？』

「ああ、それは、河合理事にでも渡してくれれば――」

*

「――という訳でな、まったく裕理と来たらいつもこうなんだ」

『あはははははは、わかるわかる、ほんつとユウつたら馬鹿だからね』

「いや、アメリカ。馬鹿というのは言い過ぎだ。彼は彼なりに……」

『はいはい、またノロケ始まったー。もう耳タコです。聞かない、聞きませーん』

「ふふ、ははは……はいはい、わかった、もう何も言わないよ」

『あ。ヤバ、もうこんな時間だ。あたし、そろそろ寝るね』

「そうか？ そんなに遅くないと思うが……いや、引き留めても仕方ないか」

『みつふいーも早く寝なよ、明日に差し支えるよ？ そんじゃね、ばいばーい』

アメリカが電話を切る。

途端に、部屋が沈黙に包まれる。聞こえるのは鵲の静かな寝息だけだ。

「それにしても、アメリカと話していると退屈しないな。楽しい電話だったよ」

さて、今度こそ。裕理に電話をしよう。

「……む？」

携帯の時刻表示が、狂っている。

「深夜の、二時過ぎ……いや、馬鹿な。そんなはずは……」

机の上に置いてある電波時計を確かめると、こちらも深夜二時を指していた。

「な……?! わ、私は、アメリカと五時間も喋り続けていたのか?!」

そういえば途中、私もアメリカも携帯の電池が切れかけて、充電用のコードを直に繋いで――。ミレディの特権が徒^たになった。女子寮の消灯は十一時だが、こなすべき仕事が多い私は必ずしもそれに縛られていない。いつもなら寮母が各部屋を回ってくるが、私が電話中だという気配を感じて、声をかけずに去っていったのだろう。

「な、何ということだ……まだ今日一日の汗を流していないのに、これでは睡眠時間が……」

それ以前に、裕理への電話が。さすがにこの時間だと彼は寝ているだろう。

どつと、疲れが襲ってきた。脱力感。もう何もする気が起きない。

入浴は明日の朝でいい。今夜はもう、寝よう。

「……せめて、夢の中で……」

疲れ果てた身体を横たえ、彼の顔を思い描いているうちに、私の意識は安らかな闇の中へと落ちていった。